

マウスと人間の行動は動きの速さを別にすれば、休息の取り方などのパターンが全く同じであることを大阪バイオサイエンス研究所(大阪府吹田市)や東京大などの研究チームが突き止め、三十日付の米科学誌「プロセス」に論文を発表した。

マウス・人間 休み方同じ

本法則が存在する可能性を示すとともに、うつ病の原因究明にもつながる成果として注目される。発表したのは、同研究所の内匠透研究室長(神経科学)や山本義春東大教授(生体情報論)ら。マウスはかごに入れ、動きを百倍の速さで早回みに反応するセンサーに敷いて動きを記録。人に腕時計型の加速度センサーを着けて普通に生活

活動時間や休息時間に、長いものや短いものがある。活動時間や休息時間に、長いものや短いものがある。活動時間や休息時間に、長いものや短いものがある。

活動時間や休息時間に、長いものや短いものがある。活動時間や休息時間に、長いものや短いものがある。

大阪の研究所・東大など

うつ病研究に活用も

「時計遺伝子」のうち「Per2」の機能を失ったマウスと、うつ病の人では長い休息時間の頻度が高いというパターンが同じだった。Per2に変異のある人で睡眠障害が起ることは知られているが、うつ病との関係は不明。内匠さんは「時計遺伝子の機能が失われることで、うつ病になる可能性はある」としている。